

末黒野 平成二十五年三月五日発行 第六十八巻第三号（通巻七九九号）

末黒野

すぐろの

3月号
(通巻799号)



焼

葱

小川玉泉

雪吊や日差をさはに苑の松
句会への出足そがれぬ朝しぐれ
参道にはりつき雨の散銀杏
三尺となき鼻先を尉鷄

落葉踏む音を聞き分け森の徑
賀状書く玻璃一面の夕茜
焼葱の甘さ覚えぬ俄か主夫
男手に茹でぬ緑の蕪の葉
弧を描く稜線の樹々冬落暉
整然と刈り株寂ぶる冬田かな
刈り株の霜のきらめき町の小田
霜解けの芝生の綺羅やごみを出す

厨の灯

松本三千夫

訃音の人の働き盛り灯影冴え
壁に映る尺のこけしの影寒し
切り貼りの見ゆる障子や火灯窓
厨の灯奢り白菜真つ二つ
冬耕のふたり離れてまた寄れる
消防車二台三台街真昼
人の住めさうな犬小屋枇杷の花
枯菊を括るや一枝ままならず
ぎこちなく風招きをり枯芒
推敲や手櫛に絡む木の葉髪
山眠る潮満つる音懐に
枯野去る枯野にこころ預けては

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

雪 吊

黒滝志麻子

芭蕉葉の風の音聞く冬はじめ
空瓶の転がる歩道冬ざるる
日の温み持つ雪吊の余り縄
刻告ぐるからくり時計街小春
名園の日暮れ明るき冬紅葉
冬蝶の舞ふやはらかき日差しかな
接岸の船のきしみや年詰まる
極月や丹塗りの宮の千木ひかり
鳥声の木々をこぼるる霜日和
鷹を見し代々木の杜の深さかな

岩 牡蠣

田中臥石



弔電を打ちぬ山茶花零れをり
海女来たる潮の滴る牡蠣提げて
岩牡蠣を食うべ銚子の海荒るる
街路樹を離れて冬日海へ落つ
着膨れて億劫となる朝歩き
末枯の砂丘や亀の産卵区
東京へ出でて羽子板市に遭ふ
いささかの酒を妻との聖夜かな
冬日射す書棚に据る広辞苑
誘ひ合ひ暮の中山競馬場

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

冬ざるる

菅野日出子

栗鼠走る建仁寺垣木の葉散る
早暁や**漁船**迎ふる**浜焚**火
土牢へ一条の日矢冬ざるる
稚児のまく五彩の散華十夜寺
歳晩や不夜城なせる街明り
シャンソンの枯葉なつかし冬北斗
鴨群れて野川の水の細濁り

雪

菅野蒔子

冬至にと南瓜届けてくれし友
凍て道をデイスリーブスの送迎車
自動ドア入る雪付けし杖の人
雪降り積む静けさおそろしくなりぬ
通院が仕事と媪暖房車
集落の無人となりぬ凍轍
年の瀬や己に気合ひ入るる日々



散紅葉 城戸 緑

落葉つむじ 堺 昌子

貼り終へし障子に風の改まる
詩の言葉探す頬杖暮早し
飛石に彩りを添へ散紅葉
枯れいそぐ園や名の付く石あまた
鴨集ふ池を掠めて都鳥
登校の子らの見つけし初氷
息白し朝の一步の重かりき

独楽のごと落葉つむじの坂がかり
人馴れの鳩をたたしむ七五三
筆築の流るる社七五三
落葉踏む音道連れに峠越え
池底の落葉泳がせ白き鯉
冬薔薇うす紅いろを重ねをり
岐れ路おもひもかけぬ冬の蝶

花 柊 熊切光子

添 水 鈴木一三

浮雲や珊瑚樹の実のつやややかに
日にはづみ枝より枝へ四十雀
夕映えや枝に重たき榎植の実
はらはらというはにほへとちりもみぢ
波郷忌の花柊のほのかなり
紅葉散る弓張月の皓々と
風寂ぶる石切場あと冬芒

添水鳴る稽古なき日の能舞台
片耳を枕にふさぐ隙間風
霜除の笹刈りに入る山路かな
湯たんぽに足を委ねて早寝癖
木洩れ日や櫛紅葉濃き一ところ
埋火や休み処の野点傘
探り得て空より青き龍の玉

青炎集

横浜 橋場美篤

古民家の煤けし梁や土間冷ゆる
饒舌の子の加はりて関東煮
しづごころに拝す御陵や多摩小春
袖垣の結び目固し石路の花
庭園を玻璃戸透かしの蕪蒸し
括らるる枯菊彩を日に返し

横浜 今泉あさ子

小流れの鷺の足取り草もみぢ
神無月名の木手入れの大足場
枯木立綾なす梢に宿る月
朝刊の開かぬまや日短し
年の暮駅に喪服の五六人
日向ぼこ児と色紙のサンタ折る

小川玉泉選

横浜 河合とき

夕映えて丘の満天星もみぢの朱
萩刈つて風筋見えずなりにけり
山峡に汽笛ふくらみ散紅葉
神々の町賑はへり松葉蟹
機関車の名は桃太郎冬うらら
ローマ字の封書の届くクリスマス

千葉 岡井マスミ

松枯れの浜に人なく潤目鱒干す
冬ざれの波音高し智恵子の碑
獅子吼せる波折り返す冬の浜
影長くなるまで浜に冬帽子
行く年の円卓に編む句集かな
晩学の句座を重ねて年惜しむ



横浜 加藤八重子

今更に運命線を見る夜長
灯を消して一輪の菊薫りをり
短日や皇帝ダリア咲き誇る
裸木やなかなか出来ぬ捨て上手
枇杷の花静かに小蜂通ひをり
苦も楽もすべて身に付き年の暮

横浜 青木由芙

裸灯にふれて掲ぐる大熊手
冬霧や羽搏く音の鷺ならむ
川風になびく和毛や冬の鷺
隠沼を飛ぶ綿虫のつと消ゆる
卑弥呼墳の鎮もる森や冬夕焼
奈良小春長谷観音の御足撫で

横浜 杉本裕子

舞岡の雑木林や鴟猛る
人気なき小谷戸の径や烏瓜
かるやかなチャペルの鐘や秋うらら
鮎色の大根の香や浜日和
参道の脇の静けさ返り花
竹林を抜け日に映ゆる冬紅葉

横浜 岩上行雄

山茶花の蜂を誘なふ盛りかな
日矢の中落葉溜まりのぬくぬくと
日向ぼこわれら似たもの夫婦なる
枝切りのすまぬ並木や冬黄葉
子に乗せて立ち漕ぐ母や息白し
枝先に氣息のこもり冬木立

横浜 辻井ミナミ

綿虫の高く漂ひ切通し
口切の茶壺華やぐ朱の紐
鐘楼の茅葺きに生ひ冬の草
寒柝の間合ひを綴る話かな
草枯れて碑出づる塩の径
鴛鴦の潜きては寄る番かな

横浜 新堀満寿美

天蓋の形に白雲山眠る
些かの葉音も立てず山眠る
四方より寄りて整ふ鴨の陣
日表へさざ波を分け池の鴨
餌に群るる鯉のたくまし枯柳
葛枯れて深く走れる崖の罅

耕 土 集

松本三千夫選

黄一色いちやう大樹の空碧し

夕映えや動かぬ雲と朽枯尾花

真夜中やゆたんぽレンジに三分間

不要物山となりたり冬に入る

九十六何時まで生きている浮寝鳥

横浜 三谷 ゑい

余生なほ染しからずや帰り花

恙なく生きる証の賀状書く

忘年会一本メのをんなごえ

白寿まで六年は直ぐ除夜の鐘

寄せ書きの国旗広げて年送る

宮地 静雄



掘り出しのマリア地蔵や赤のまま

菩提提子のこぼれ踏まるる陵墓かな

展覧の芭蕉の笈や文化の日

川岸に鷗居並ぶ小春かな

山茶花や踏む玉砂利の音聞き

吉岡 孝子

買出しのメモを片手に年の暮

点ざれて影のきはたつ聖樹かな

年の瀬やからくり時計正午打つ

極月のネオン映して街の川

高階の夜景十両年忘

峰 幸子

色も香もうちに秘めたり冬薔薇

葱届く四平世紀の絆にて

防寒の一つとなりぬ割裂着

歳月に加速つきたる師走かな

山茶花や和のころもて生垣に

山本 茂子

飛び石を染むる色葉や風の音

枯芦や風のままなる舳ひ舟

風の音聞こえぬさまに浮寝鳥

床板のみしみし軋む寒早

竹林のひそと落柿舎初時雨

園田 恵子